

# 会話に不可欠な「言い淀み」の機能の一考察

池田 佳子

## 1. はじめに

本稿で取り扱う「ことば」は、「アノー」「エー」「ソノー」などの日本語発話におけるいわゆる「言い淀み」である。言い淀みは、広辞苑によると「ことばがすらすらと出ず、とどこおること（言い淀む）」と解説がある。非常に広義で、その滞り方によってさらに細分化できそうな定義である。小出(1983)の定義によると、文節末の母音を長く引いたり、「エー」「アノー」などの表現の他にも、「そうですね：」や「なんて言いますか：」などの表現、さらにはことばの反復などの形をとるものが「言い淀み語」の部類だと見なされる。

心理言語学の視点から言い淀みを定義すると、「談話中の検索、演算、編集に関する作業バッファの管理に関わる心的操作のモニター標識」(田窪 1995)となる。言語習得研究の諸分野では、言い淀みは主に dysfluency (非流ちょう性) と呼ばれ、スラスラと産出される発話の妨げになるものはすべてこのカテゴリであると認識される。この dysfluency は、fluency (流ちょう性) を目標に掲げる言語習得研究にとっては邪魔者である。いかにこの dysfluency を減らすことができるか、そのために行う言語教育の方法とは何かを模索するのが正統な研究課題であると一般に広く理解されている。

(第二) 言語習得分野においても、言い淀みすなわち「排除されるべきもの」、という考え方を支持する研究は数多くある。例えば、学習者の第二言語口頭産出能力の評価において、fluency(流ちょうさ)を測定する際に、この dysfluency の類と考えられた言語産出の頻度をカウントすることで流ちょうさの上達度を図る基準としたり(Ortega, 1999; Skehan, 1996)、被験者の発話量を調査する際に、一文(発話)中に産出された異なり単語数を計算することがあるが、言い淀みを経て行われた「言い直し(例：それは：それはちがいます)」を取り扱う時は訂正後(二度目の産出)のみをカウントし、一度目の言い淀みとして現れた単語は無視するなどの対処が慣習的に行われてきた。

以上のように、言い淀み語は、一般的に発話構造内でいういわゆる「無意味

語」と見なされがちである。たしかに、言い淀みは「ことば」の中でも従来の統語論と意味論がほとんど口出しできないタイプの言語的および非言語的要素である。しかし一概に排除すべきものであると見なすのは危険である。そこで、この言い淀みの「魅力」を再考しよう、というのが本稿の試みである。語用論の視点からこの「言い淀み」を考えていくと、これらの「無意味語」は実は非常に複雑な役目を担ってくれていることが分かる。その魅力は、ことばを談話レベルにおいて分析することで初めて理解できる。このような、従来の言語学の枠内では言語使用の一部として注目されてこなかった「ことば」の実態の解明を探る動きは90年代から始まった。インターアクションの言語学、と言われる言語学の中でも大変新しい分野である。会話分析などの微視的談話分析の手法を用いて自然会話に見られることばを科学していくこの分野は、言語学への貢献にとどまらず、社会学、人類学、メディア研究、政治学などに幅広く新たな知見を提供している。

本稿でもこのインターアクションの言語学の視点から、先行研究にも言及しつつ手元にある談話資料を実際に考察し、そこに顕われる「言い淀み」とその機能について解説していく。

## 2. 談話資料の分析から考える「言い淀み」の機能

言い淀み表現に関する研究は、多くはないが昨今徐々に増えつつある。本稿は、言い淀み表現は会話の中でその機能が形作られるものであるという見解を支持する。したがって、本稿で取り上げる文献も、自然談話における言い淀みを検証し、その実例から得た現象を分析者の主観をできるだけ交えずに考察したものに限った。その上で、筆者自身も、実際の自然談話データの分析を通して「言い淀み」がどのように私たちのコミュニケーションの一端をなしているのか、考えていくことにする。

### 2.1 デリケートな発言内容を和らげるために発される「言い淀み」

言い淀みは、話者が言語産出を行う過程で偶発的に挿入してしまう表現であるという理解が従来のイメージであるが、以下に上げる山根(2007)の例では、言い淀んだのは実は話者が修辭的なストラテジーとして使用している様子が捉えられている。例1を参照されたい。

例1 山根(2007:2) 「徹子の部屋」 より K:黒柳 U:内田

- 1 K: あなたは、アノー、お母様とお父様と、(はい)  
 2 それから、エート、  
 3 U: 妹。  
 4 K: 妹さんとね (はい)、とてもお幸せに暮らし  
 5 ていらっしゃるそうですけれども (はい) そ  
 6 こへ行き着くまでにずいぶんなかなか大変  
 7 だったんですって。  
 8 U: そうですね。いろいろあるもんですね。  
 9 アノー、マー、うちの母は、・・・いろいろあ  
 10 りましたね。  
 11→ K: ねえ。でもお小さい時は、ソノ、お、ソノ、  
 12 お別れになったお父様と (はい) お母様とが  
 13 六本木で (ええ) で、  
 14 U: アノー、夜の飲食店をやっていました。

この例に関しては、言い淀み表現の認識は山根(2007)を踏襲している。ここで着目したいのは11行目のK(黒柳徹子)の、U(内田有紀)に話しかけている発話である。ここでは、内田の母親が再婚をする前の生活に言及しているのだが、私生活に関わるデリケートなトピック(例:母親の離婚)であるため、言いよどみ「ソノ」を何度か挿入し、さらに言い始めで自己修正「お、(ソノ)、お別れになった」をしながらやっと発話を産出するという形を取っている。話者がこのように言い淀むことで、聞き手にその気遣い・配慮の意図が伝わる。内田の対応にも着目してみると、12行目でKが「お父様と」と述べたところで間髪を入れずに「はい」と返答をし、さらには14行目でKの発話を受けて文の残り半分、「六本木で夜の飲食店をやっていた」を自らで補っている。積極的にKとの発話の相互構築を行うことで、11行目などに見られる気遣いに報いている。山根(2007)にも指摘があるように、言い淀みにはコンテキストの意味を変える役割はないが談話管理上重要な機能を果たしている。

## 2.2 疑似対話臨場感を作り出す「ですね」

言い淀み語の中には、終助詞と共起してある一種の chunk (固まり表現 Miller, 1956; Ellis, 2003) が成立しているものがある。例えば、先ほど言及

した「そうですね：」や「ですね」などの表現である。Ikeda (2007)では政治家のモノローグ演説談話の談話分析を行っているが、この「ですね」の使用に関する一考察がある。4人の都議会議員立候補者の演説口調を調べた結果、政治家としての職歴のある2名の発話中に「ですね」の挿入が多く観察されたのに対し、今回初挑戦の残りの2名は全く使用が見られなかった(経験者：9回、挑戦者：0回)。例3は経験者の発話の一部である。「ですね」の挿入が3行目と5行目に観察できる。

## 例2 Ikeda (2007:63)から抜粋

西 [第5期目立候補者・男性・50代] (00:45:38-)

- 1 町会委員会(.)あるいは(0.2)
- 2→ さまざまなボランティアの人たちが>ですね<
- 3 自分たちの町は自分たちで守るんだ.
- 4 そう言う：((ベル)) ことで献身的な
- 5→ 活動をしてきた成果が**ですね：**
- 6 大きな地域の安全安心がひろがる
- 7 (.)原因を作ってきているわけです.

注：>word< は発話の速度が速まったことを示す。

((ベル))は話者の持ち時間をしめすベルの音

例2では、3行目の市民の声を創作した引用的発話「自分たちの町は自分たちで守るんだ」の直前に、「ですね」が挿入されている。5行目にも「ですね」が挿入されている。この直後の発話を見ると、5行目までで提示された名詞句をうけた述部が続いている。4行目から7行目までが一つの長々しい一文を構成しているのだが、この文を主語部と述部で区切る役目としてこの言い淀みの「ですね」が使用されているわけである。

「ですね」に組み込まれている終助詞「ね」は、Morita(2005)などでは単なる文末を示すものではなく、聞き手への相互行為(インターアクション)を強く意識し会話の参加者の参加を促す interactional particles(相互行為助詞)である、との指摘がある。この視点を取り入れると、経験者の発話にこの「ですね」が多用されていることの語用論的意味が理解できるのではないだろうか。演説談話はいくまでもモノローグであり、聞き手は演説者にいくら「ですね」

と訴えかけられようとも返答はできない。しかし、あえてその相互行為を促す「言い淀み」を使うことで、演説者は聴衆に対し「私はあなた方を強く意識して積極的にアピールしていますよ」と暗に伝えることができるのではないだろうか。

### 2.3 発話行為を執行する上で不可欠な「言い淀み」

言い淀みは、依頼、褒め、謝罪などさまざまな発話行為と共によく観察される。例3はカノックワン(1995)で見られた断り発話の例であるが、「エートネ」などの言い淀む表現が観察できる。

#### 例3 カノックワン (1995:30) から抜粋

A/B 20代後半の男性二名

- 1 A えーと、何ちゅうんだろ。
- 2 言葉を勉強してる友達なんだけど。
- 3 B うん。
- 4 A 電話の内容を録音して、
- 5 それを、なんか、ほしいって、
- 6 頼まれてんのね。
- 7 (略)
- 8 (0.5) それー、ちょっと、協力してもらえない？  
(略)
- 9→ B (0.5) エートネ、
- 10 A うん。
- 11→ B (0.5) おれ、ちょっとねー、
- 12 あしたぐらいからしばらくいないんだわ。
- 13 A そうか。

上記の例では、9行目の発話冒頭で、発話を遅滞させる0.5秒の沈黙とそれにつづく言い淀み表現「エートネ」が見られる。Aの依頼がすでに行われているため、Bのそれに対する依頼がここで産出されるべきである。この場合、すぐにその依頼を受ける回答(例「いいよ」)が来る場合、これらの言い淀みと共に共起することは少ない(Pomeranz, 1984)。聞き手が望む行為以外の返答を行う際に、これらの言い淀みを先に行い、相手に返答の方向(断り)を指標してい

るのである。つまり、言い淀みは、それ自体が非嗜好的返答の示唆をする談話標識として機能することがわかる。

例 4 は、先ほどの例 3 とは逆に、言い淀みが依頼者側の依頼行為を展開する上で観察できる例である。話者 A がある友人の実験の被験者として B に参加を依頼している。日頃からよくあるような依頼内容ではないため、依頼者の説明は何回かの話者交代を交えて展開しているのがわかる。

#### 例 4 BTS による話し言葉コーパス (宇佐美まゆみ監修 1997)

- 1 A: あのね、その友達との雑談を録音するんだけど : :
- 2 B: うん.
- 3→ A: それで、アノ、時間がね、15 分ぐらいで : :
- 4 B: はいはい.
- 5→ A: アノネ、ソノー、500、謝礼、アノ、お礼がもらえるらしくて : ,
- 6 B: うん.
- 7 A: で、それが 500 円の図書券なんだって.
- 8 B: あー.
- 9 A: うん.
- 10 B: それで、まあー、その場所がゆっくり話ができるところでやるっていう感じで : :
- 11 B: 今やるの ?
- 12 A: いや、今じゃないのかな(.)それはまた これ(.)あの その人に聞いてみるけど.
- 13 B: あー.

ここで注目したいのは A の 3 行目と 5 行目である。3 行目の言い淀みは「時間が 15 分 (かかる)」という情報を伝える前の「アノ」である。これは、新情報を相手に正確に伝達する際に話者がおこなうストラテジーとしての「間」の構築である。定延・田窪(1996)にも指摘があるように、人間の情報処理能力を最大限に利用する上で、情報提示の前置きとして言い淀みを使用されると、受け手は次に来る重要な内容への心準備ができる。A は B の理解度を推し量りながら、新情報提示の前に指標としてこの「アノ」を使用しているのであろう。次に、5 行目の言い淀み表現であるが、まず 3 行目と同様に謝礼が 500 円であるという情報をつたえる上で「アノネ、ソノー、」といった言い淀みを挿入している。その直後、「500」といったん言い始め、「謝礼」と言い直し、さらに表現自体を大き

く変化させて「お礼がもらえるらしくて:」と述べている。7行目を見ると、謝礼が500円の図書券である、という具体的内容であることが改めて分かる。5行目ではこれを一度引っ込め、遅延させて提示している。この言い直し型の言い淀みだが、単なる言い損じであると理解するのは安直すぎるだろう。第三者が見ても、5行目でもその意図する内容は理解可能である。しかし、Aは金銭的な報酬に関する非常にデリケートな情報を言い淀む形ではほめかし、うまく受け手に伝達したのではないだろうか。言い淀みがいつもアクシデントであるとは限らない。言い淀むことで達成される社会的な行為も存在するだろう。筆者はこの例4がその一端をかいま見せてくれていると考えている。例3と4は、断り、依頼などの私たちの日常で頻繁に執り行われる発話行為を取り扱っている。これらの行為を成立させるために言い淀みが「無視できる」どころか、むしろ不可欠な存在となっていることに着目すべきだろう。

#### 2.4 発話の進行過程を修正する言い淀み：ディナー・トーク

次に、言い淀みが果たすもう一つの機能を複数の発話者の構築する談話場面で考察する。図1が、収録された発話（例5）の場面の参与人物と位置を示している。この場面では、ある大学において日本語教師をしていたRが、担当したクラスの授業風景をデジタルカメラで取ったものを見せながら皆と話をしている。Sが手元にカメラを持ち（図1ではカメラはCの陰で見えない）、隣のKもSの真横に位置するため画像が直接見られる、という設定である。例5だが、その1行目でRが、自分が担当した教室の学生の1人（ドイツ人）についてコメントをはじめている。

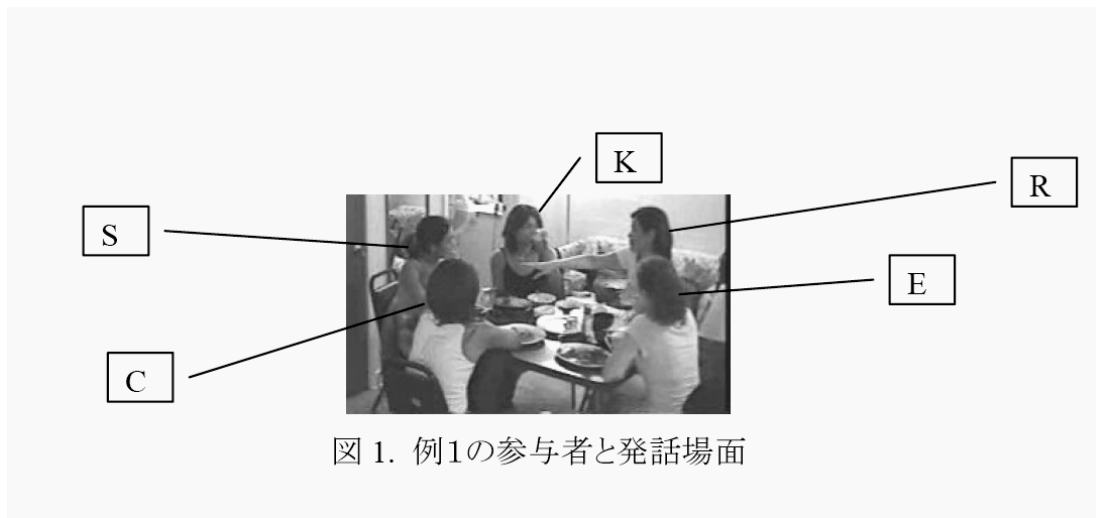


図1. 例1の参与者と発話場面

## 例 5

- 1 R: なんかさ:ドイツ人の子ってさ:(..) みんな:なな人ぐらいo-(あの) アメリカ人(だ  
 2 から) なな人 アメリカ人で:(.) 夏で暑いから ↓さ みんな ↑こんなカッコで来ん  
 3 だよ学校に. .hh だけどそのドイツ人の子だけいつもボタンダウンのシャツ来て: =  
 4 E: =m(h) tsk! ((含み笑い))  
 5 R: 。あの。ちゃんとパンツ [はいて [:  
 6 K: [u(w)- [k- 黒人の(.)子も: >。きっちりしてる。く  
 7 R: あ! 黒人の子も >。結構。きっちりと↓してたね<=。そういえば) =  
 8→ R: あ(・) ↑アレハネ:, ↓ アノ:(.) ソレヲ:(・)やんなきゃいけない=ロールプ  
 レイの日  
 9 だったから:,  
 10 K: 。。hmm ↑ ↓。。(グラスの中のものを飲みながら))  
 11 R: ネクタイまでしてきて[ (んだけど)  
 12 S: [ あ:(・)そうなんだ.  
 13 C: ふう:ん  
 14 (1)

この例で着目したいのは8行目のRによる言い淀みである。Rが言及したドイツ人の学生に加え、もう一人の学生もネクタイをしてくるようなフォーマルな装いをしていることをKが指摘した際(6行目)のRの発話である。冒頭部分に言い淀み表現が連打されている。発話末尾で「(この学生も)ロールプレイの日だったから(フォーマルな服装をわざわざしてきたのだ)」と説明にたどり着くまでに、さまざまな行為をこの冒頭の言い淀み表現の間におこなっている。ひとつずつ解説していこう。まずRの発話はKの指摘を受け、7行目から始まっている。Rはひとまず7行目でKの指摘(「黒人の子(学生)も装いがフォーマルだ」)を受け入れる表示をする。しかし「そういえば」と自問自答のような発話の直後に8行目冒頭で「あ」と何かを思い出したかのように声を発する。この「あ」は Heritage(1984)が「認識変化指標(change-of-state marker)」と呼ぶ一種の談話標識であるが、ここでは以前と異なる意図の発話が次に挿入される予知の機能をしている。「あ」につづいて「アレハネ: アノ:ソレヲ:」と言い淀み、Kの指摘通りではなく、実は特別の日(ロールプレイの日)であったのだという、不同意の意見提示(disagreement)を行っている。一度同意しておいた後にこのように軌道修正を行うには、ポライトネスの視点(Brown & Levinson, 1987)か

らみてもかなりの会話上の負担となる。したがって、この言い淀みを行うことで、その軌道修正がうまくなされているのが分かる。

Rはこの8行目の発話と同時に上記の図1のように右手をS(カメラが手元にある受け手)に掲げ、保持した状態で発話を行っていた。言い淀みは、それ自体内実的な情報はあまり含まれていないため、他者にとっては(もしターンを取得したいと考えているのであれば)格好の移行適切場所(TRP Turn Relevance Place)としてみなされてしまう。このジェスチャーを同時に行うことで、言い淀みが他の参加者によってターン交代が許容される場であると誤解されないよう、話者のターン維持の目的もあると考えられるだろう。

## 2.5 発言権を主張する言い淀み政治討論談話

例5では、言い淀むことで話者に利権が回ってくる事象として、発言権の維持の達成を説明した。この例では一般的な「アレハネ:」などの言い淀み語が使用されていた。下記の例6では、言い淀みの中でも反復の言い淀み(例:「**金曜日、金曜日**にしかできないんです」)の使用が観察される。この例でも、発言権取得・維持に言い淀みが貢献している。

例6はサンデープロジェクトというTV朝日系列の長寿番組の(政治)討論場面である。パネリストとして参加した自民党厚生労働委員会委員長(K)と司会の田原総一郎(T)のやりとりであるが、ここでは2003年当時問題になっていた保険料3割負担制度について議論している。田原が自民党の一部と医療界の癒着を指摘したところ、Kが反論をしているのが1行目である。

### 例6 K:自民党衆議院議員 T:司会(田原総一郎)

- 1 K: (いや)それはないです [ね(.)それは ]  
 2→ T: [医者や (.5)] 医者や  
 3 薬屋 [や それらをまもるために  
 4 K: [(\*)負担を きちんと (\*\*)  
 5 T: ちょっと まって=  
 6 K: =はい。は[い。  
 7 T: [あなたがいるから 言ってん° の 前で°  
 8 え::やろうとしてんだ と。(.)はい反論。

ここで着目したいのは2行目の田原の発話である。「医者や」と繰り返されてお

り、「言い直し、リペア」という言い淀みの一種ととらえることができる。この「医者や」がなぜ、二度繰り返されているのか、その要因にヒートアップしたやりとりで頻出する発話の重なり現象が関係している。1行目で、Kは田原の自民党と医療団体癒着関係の指摘を受け、まだ発話の途中であるTのターンに強制的に割り込んだ形で発話をはじめている。このような interruption(割り込み発話)は必ずしもいつも迷惑行為とみなされるわけではないが、ここではその挿入が田原がはっきりと批判意見を述べている最中、つまり発話を妨害されてはならない場所で起こっている。そのため、TはKが割り込んで来たために生じた重なり部分について、再度クリアな状態で同じ発話を繰り返している。この言い直しは、Kのターンの略奪行為に対する防御策となり、ターン維持に貢献している<sup>1</sup>。

#### 4. 終わりに

以上、実際の会話例と共に「言い淀み」現象の価値を見直してきた。本稿では従来の言語学で見過ごされてきた言い淀みの機能のいくつかを扱った。今後さらに多様な場面における言い淀みの役割を考察していく必要があるだろう。言い淀みの形も多様であることも本稿の例で実証されている。多様ではあるが、何でもかんでも言い淀みとなるのではない。日本語コミュニケーションにおいて言い淀みだと認識されている表現やその体系についての調査は稀少ではあるが過去に研究がある(Nagura, 1997など)。しかし、どの言い淀み語がどんな場面において使用されやすいのか、というような傾向までをさぐった研究は筆者の管見の限り見あたらない。今後まだまだ広がりを見せるトピックであろうというのが現段階での見解である。

本稿の最後の議論点として、この言い淀みに関する理解をどのように日本語教育へ応用していくべきであるか、ということを少し考えたい。いかなる研究結果であれ、日本語教育への還元は筆者にとって大切な課題であり、日本語の魅力を探求する最終目的でもある。日本語を教室で学ぶ学習者にとって、教科書では取り扱われない日本語のコミュニケーションの側面があること、そしてそれらの必要性を真摯に感じてもらうためには、言い淀みの機能を早い段階から学習することは、よい契機となるのではないだろうか。本稿で言及したような、発話行為の一部としての言い淀み(例:断りを示唆する談話標識としての

---

<sup>1</sup> この言い直しの後もKはまだターン略奪をさらなる重なり発話で試みているが、田原が5行目以降にみられるような「ちょっと待って」といったKの発話を差し止める明示的行動に及び失敗に至っているのがわかる。

役割)などは、そのタイミング、音質、そして会話構造の理解などをすべて理解しそして処理できなければ駆使できない。学習者にとっては、大変スキルを要する作業であろう。言い淀みの特徴を詳細に分析し、その機能を説明できる教師の能力も要求される。言い換えれば、言い淀みについて学ぶ過程で、優れた教師の指導の下、非常に実り多い学習ができるということである。言い淀みを含む多くの語用論的言語使用の指導法に関する研究は第二言語習得分野において目下模索中である (Rose, 2005 など参照)。個人的な視点を述べると、語用論的側面に関する教育方法は、まず全ての機能を網羅して一つ一つ手取り足取り教えなければならないのではないとの理解が大切だと思う。現実的に考えても、例えば言語ポライトネス一つとってもそのすべてを網羅し学習者に伝授することなどまず不可能である。語用論的要素は、その場その場のコンテキスト次第でダイナミズムが変化するものである。例えば「言い淀み」というコミュニケーション現象があること、日本語会話（または対象学習言語のコミュニケーション）の中で多様な役目を果たしていることに学習者が気づく (Schmidt, 1995) ことが第一の目的である。その上で、学習不可欠と思われる機能から順番に、実際の会話例と共に教授し、さらに実践的な練習の場を設けるシラバス・デザインが必要となるだろう。一度現象に気づいた学習者は、自主的にそれらに関する現象に着目することができるようになる。つまり教師の指導を飛び越え、自らその現象を耳にする、そして目にするインプットから学習しやがては習得して行くことだろう。語用論的側面の教授は、その切っ掛けを作るのが教室内学習の最大の目標であると筆者は考えている。

## 引用文献

- 池田佳子(2007) 「政治家の社会的アイデンティティ構築—発話の「宛て名性 (addressivity)」との関係—」第20回社会科学言語学会研究大会予稿集 pp. 62-65.
- 田窪行則(1995) 「音声言語の言語学的モデルを目指して—音声対話管理標識を中心に—」『情報処理』
- カノックワン・ラオハブラナキット (1995) 「日本語における「断り」—日本語教科書と実際の会話との比較—」『日本語教育』87 日本語教育学会 pp. 25-39
- 小出慶一(1983) 「言いよどみ」『講座 日本語の表現 3』 筑摩書房
- 山根知恵(2007) 「日本語の話し言葉の特徴について考える—異なるアプローチによる談話分析の試み— 談話構造とフィラー」第10回日本語用論学会研

- 究大会予稿集 p. 2.
- Andersen, G. & Fretheim, T. eds. (2000). *Pragmatic markers and propositional attitude*. Philadelphia/Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Brown, G. & Levinson, S. (1987).
- Couper-Kuhlen, E & Selting, M. eds. (1996). *Prosody in Conversation: Interactional studies*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ellis, N. C. (2003). Constructions, chunking and connectionism: The emergence of second language structure. In Doughty and Long. (Eds.). *The Handbook of Second Language Acquisition* (pp. 63-103).
- Heritage, J. (1984). 'A change-of-state token and aspects of its sequential placement'. In: Atkinson, J.M., J. Heritage, eds. *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*. Cambridge: Cambridge University Press: 299-345.
- Ikeda, K. (2007). Audience Presence and Japanese Political Oratory: A Case Study Of A Municipal Assembly Candidate. Ph.D. dissertation. University of Hawaii at Manoa.
- Miller, G.A. (1956). The magical number seven, plus or minus two: Some limits on our capacity for processing information. *Psychological Review*, 63, 81-97
- Morita, E. (2005). *Negotiation of Contingent Talk: The Japanese Interactional Particles Ne And Sa* John Benjamins.
- Ochs, Schegloff & Thompson eds. (1996). *Grammar and Interaction*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ortega, L. (1999). Planning and focus on form in L2 oral performance. *Studies in Second Language Acquisition*, 21:109-148
- Pomeranz, A. (1984). Agreeing and disagreeing with assessments: some features of preferred/ dispreferred turn shapes, In J. M. Atkinson & J. Heritage (eds.), *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*, Cambridge: Cambridge University Press, pp. 57-101.
- Rose, K. (2005). On the effects of instruction in second language pragmatics. *System*, 33 (3): 385-399.
- Schmidt, R. (1995). Consciousness and foreign language learning. In R. Schmidt (Ed.), *Attention and awareness in foreign language learning* (Technical Report #9) (pp.1-63). Honolulu: University of Hawai'i Second Language Teaching and Curriculum Center.
- Schiffrin, D. (1987). *Discourse Markers*. Cambridge: Cambridge University Press.

Skehan, P. (1996). Second language acquisition research and task-based instruction. In J. Willis & D. Willis (Eds.) *Challenge and change in language teaching*, pp.17-30. Heinemann: Oxford University Press.